

『枕草子』を前田本で読むということ

——いわゆる共通テストの向こう側へ、もしくは多様なものたちへのまなざし——

〈キーワード〉 枕草子

前田本

共通テスト

授業改革

多様性を知る

金井利浩

一 我が愚昧を恥じることから——「はじめに」に代えて——

二〇二一年度からの実施が予定されている大学入学共通テスト（以下、「共通テスト」）に係り、その活用が言われ数多の非難を浴びていた英語での民間試験が先送りとなり、国語・数学での記述問題についても、その導入の延期が決定された。

そも、母体としての共通テストそのものが、試行されたプレテストをとおして、「新学習指導要領」を先取りするかたちで作成され文部科学省の描く理想を体するものとなろうことが露わになるや、実施の是非を厳しく問われ来たったこと、知られるとおりだが、いずれ滑らかかつ穏やかにといかなくなれば、強引にでも実施すること必至であろう、そう半ば以上の諦念をもって事態の推移を横目で見てきた稿者などは、なればこそ、あるいは、それでもなお、これまで、少なくとも「古文」領域については、新・共通テストが願ひ、狙ひ、目指しているのであろうと判断されるものたちを、まじめに洗い、それに対するわが授業内容・スタイルの耐性の存否を問い、授業のさらなる改革の要を確認してきたのであった。

だが、共通テストは教育現場からの「古典」の「退場」を暗々裏に告げている、らしい。巷間にあるのは、まず一つ、それが古典だと勘違いをしているのではと訝（いぶか）まれるほどに文法事項の説明のみでお茶を濁している教員やその授業では、新テストにはまるで太刀打ちできない、あるいは裏返して、文法なんかばかりやっていたって何にも通用しないのだから、古典なんてやめちゃえば……、という囁き。もう一つ、和歌を教えられない教員やその授業では、新テストにはとうてい挑み得ない、あるいは翻って、和歌一首わか

るようにならないなんて、そんなの古典じゃないよ、やめやめ…、という眩き。さらにもう一つ、「古典探究」という看板に尻込みをするような教員やその授業では、新テストには端から向き合えるはずもない、あるいは翻して、「新学習指導要領」は、それが謳う「古典探究」の内容があまりにも手に余る、そんな授業の理想的にして実質的な展開はとてもとても無理だ、と現場が思わざるを得ないように巧みに仕組まれている…、という噂。

そうした「噂」や「眩き」、さらには「囁き」が、多かれ少なかれ真相を穿っているのであれば、それらを聞き過ごしてきたわが蒙昧も極まれりと自省するばかりだが、それにつけ、先に白状した「洗い」や「問い」、さらには「確認」の、なんと愚かな営みであつたことか――。

しかし、いま、事の真偽を確認する術を識らず、また暇を持ち合わせない。となれば、これまでのわが実践が、さまざまな意味やレベルで有用であると信じるほかない。信じて突き進むしかない。

手前味噌にて塩も辛い、稿者は、本誌前号所載の拙稿「『伊勢日記』を異本で読むということ」の掉尾を次のように結んでいた。

……二〇一八年度は第二学年の「古典B」において、一般に三巻本で読まれる（ゆえに教科書に載る本文も三巻本を底本とする）『枕草子』を、いわゆる前田本によつて読んでいる。たとえば「木の花は」の段は「橘」のくだり、三巻本「花の中より黄金の玉か」と見えて…」への、『和漢朗詠集』は具平親王の「枝は金鈴を繫けたり…」に拠る」との注の、むしろ前田本「花の中より黄金の鈴か…」との契合の発見、あるいは「五月ばかりなどに」の段、「蓬」は「うちかかりたる」（三巻本）のか、それとも「かへたる」（前田本）のかをめぐる議論などなど、比較をとおしたればこそその読みの補完や鍛錬に確かに向かい得る、しかも、それこそ生徒たちとの〈会話〉や生徒同士の〈会話〉が現にある、そうした授業の〈いま・ここ〉へのひそやかな愉悦を、じわりと感じつつある。

翻って、向後も求められるはずの、同じ事象でも表現によつて生じる差異について思考する力、和歌の解釈や複数の文章から必要な情報を抽出して事柄を判断する力は、「共通テスト」の如何を問わず、そも「古文」領域の命題であつたはずである。その意味で、異本への挑みは、授業や授業観の更新への意識改革を動機づけるものとして、決して無用ではあるまい、と観じているところである。

「新学習指導要領」を踏まえてなお、共通テストなるものの向こう側へとひらりと降り立った地点から授業を組み立てたい、あるい

は組み立てられる授業を模索したい、そんな念いから二〇一九年度も、新たな第二学年の生徒たちとともに、前年度とは章段を変えて前田本枕草子を読んだ。「伊勢日記」同様、これもまた生徒と協働ないし競闘して読むに堪え得るテキストである。

現下、私かに続けてきたその本文の整定ならびに通釈の作業はちょうど折返し点を過ぎた。いずれその全貌を、それこそ「古典探究」の料、もしくは授業者の手控えとされたく、必ず江湖に晒すつもりだが、本稿ではひとまず、概要と思われる章段について存念を陳べてみたい。

二 前田本枕草子とは

さて、本題の前に、諸本のことに触れておく。まずもって、平安期の作品たちのなかで、その本文状況が枕草子ほど複雑にわたるものはない、という。その伝本は、周知のように、こんにち、いわゆる雑纂形態のものとして三卷本（安貞二年奥書本）と能因本（伝能因所持本）、同じく類纂形態のものとして前田本（前田家本）と堺本、つごう四系統に類別されているわけだが、章段の排列における秩序立ったところのない前者から、そのある後者へという改修はあっても、その逆はあるまいと目され、また、三卷本の無造作ないし簡素な文体から、より柔軟ないし屈折した能因本の文体へという改訂の過程は考えられても、その逆の過程は考えがたい、とも目されて三卷本優位の流れが形成され来たったこと、それも知られるとおりである。

そうしたなかで前田本は、というに、およそ冷遇されてきた。あえて言えば、そこに「不当に」との形容を冠したくなるほどに、冷やかな扱いを受けてきた、と括ってよいだろう。むろん、いずれの伝本であれ、事が枕草子の場合には、特に総体としての価値が問われるのは当然である。それにしても、「類纂」という加工の手が入っていることをもって直ちに雑纂形態本の下位に置いたのは、あまりに性急な処遇ではなかったか。さらには、「前田家本は伝能因本と堺本とを底本として集成して作られた後人による改修本である」との仮説を「論証」しておきながら、前田本が参考にした伝本の中には三卷本も含まれていたのではないかとする立場からの、「前田家本は現存伝能因本の源流本と現存堺本の源流本とを主たる底本として作られた後人による改修本である」との修正説が提出されるや、それを認め、前田本編者が使用した異本の中には三卷本もあったと考えるのが妥当であると転向した、その手続きは、それこそ妥当性を欠くものではなかったか。いや、そのような申しようはフェアではあるまい。右の「論証」は楠道隆「枕草子

異本研究（上・下）——類纂形態本考証——（『國語・國文』一九三四年六・七月）によるものだが、当論考は、前田本の利用価値を「伝能因本系統の最古本文を伝へるものとして活用する事にある」として評価する基軸を持ち合わせる、かつ、「仮説」から「論証」に至る過程で見せた本文の解体ないし他本との比較といった一連の作業についてはその労を多とすべき、素直に頭の下がる成果であったと言うべきである。また、「続枕草子異本研究（その二）」（『神戸大学教育学部研究集録』第四二集、一九七〇年三月）で見せた〈転向〉は、学問的態度として誠実この上もないものであった。さらに、ほどなくして右の論考を二つながら収めた『枕草子異本研究』（笠間書院、一九七〇年）は、それを繙いた者であれば誰もが感じずにはいられぬであろう、劈頭の口絵写真に添えられたキャプションから「あとがき」の掉尾の一文まで、著者の清廉篤実なる人柄がにじみ、あるいはそうした側面が作用したところも現にあったかと純粹な意味で推察するのだが、ともあれ、異本研究におけるいわば聖典的な地歩の占有を聴されたのだ。だが、おそらくそのときである、前田本の今日的な評価・位置取りは決したのである。すなわち、鎌倉中期を下らない写本で、現存諸伝本の中では最も古いが、能因本と堺本とを底本にして集成された、後人による改修本である——。楠が自認していたはずの〈転向〉は遠景へと退き、当初の「論証」が大いに前景化した恰好である。念のため申し添えれば、それは楠の所為なのではない。三巻本ないし能因本という雑纂形態本をもって原態と説く、もしくはそう見たい向きには、前田本の「最も古い」ことこそ隘路、その意味で、それを容易に決潰し得る「論証」は、宝珠でありまた文字どおりの金科でもあったのである。その「論証」と信じたものは、その時点で既に、そもその「仮説」そのものである。冷静に率直に顧みられたい——いま目の前にある、その実態を明らかにしたいXは、どうやらBとCとから成っているらしい、と直感した。かれこれ検証の結果、成り立つと信じられた。ところが、そのXにはAの要素も含まれているのではないかと、との異見が提出される。そこで改めて検証を経るや、いかにもAの要素は含まれ、そのみならず、Bはこんにち視認できるBそのものではなくてその祖先、Cもまた同様にその祖先と考えるべきことが確認された。しかるに、祖先であるということは、その血は真つすぐにXにつながっている。BとCから成っているという根幹に誤りがあるわけではない。それで構わないのだ——かく辿り来たつてみれば明らかのように、事は「仮説」へと戻ってしまったのである。にもかかわらず「論証」として聖なる位座に据え置かれたそれは、だとすれば、すでに真の論証たり得てはおらず、ほんとうは0から改められねばならなかったはずなのである。

翻って、前田本の淵源に係って確実な証拠のないものを「宝珠」にし「金科」にしてしまった私たちは、前田本は能因本と堺

本とを集成したものではないかというひとつの仮説を、そのままひとつの認識方法にしてしまったのではないか。おそらく、それを方法として手にしたこと、その角度からしか前田本を見ることができなくなってしまうたのである。

歴史に徴して、認識方法の獲得は、しばしば物事を自在に見る精神の喪失ないし放棄を招来してきた。そればかりか、私たちは認識することによって、認識したとおりの世界が実際にあると思ひこんでしまうという誤謬をも、繰りかえしおかしてきたのではないか。前田本をめぐっても、私たちは例外を生み出し得ず、「伝因本と堺本とを底本として集成して作られた後人による改修本」と見切られたそれは、ついにそれ以外のものではなくなくなってしまったのである。果たして、そこにある浮動的なるもの、より始原的なものへの私たちの想像力は閑却されたままである。

だが、前田本四冊のうち、いわゆる類聚章段を収める「はるはあけぼの」の冊ならびに「めでたき物」の冊のなかの各章段は、たとえば次のように書写されている。

ふるものは

時雨 あられ 雪 にくけれとみそれのふるに雪のましり
てふりたるおかし

うれしき物

またみぬ物かたりのおほかる 又ひとつをみていみし
うゆかしうおほゆる物かたりの二みつけたる心をと

見てのとおり、いずれも始発は主語ではない、標目なのだ。その標目を、この書写形態において見つめ、そこから、「ふるものは？」とか、「うれしき物！」とかといった中宮定子の下問・詰問の声音を聴き取ったとて、決して牽強ではないだろう。清女の日々の身の出来事や思念を記したいいわゆる随想章段や日記章段のはざまに折々に放たれる「――は」型や「――物」型の章段は、そういうものだったのではないか。そしてその延伸上に、「わたしがこれまで訊ねた『――は？』は、いくつくらいあったかしら？」とか、「わたしが質した『――物』はどれくらい聚まって？」とかといった、中宮の好奇・冀望に由来する類纂への下命・発声を仮に想ったとて、強ち附会ではないだろう。さらにその上で、類纂作業にもなつて字句文言に大なり小なりの加除・改変の筆が加えられたとしたら……。三卷本・能因本には存するあのような跋文を前田本や堺本が有さぬ所以も、してみれば暁然というべく、類纂形態の伝本の源は、存外、そんなところにあつたのでは、と思われてくるのである。

類纂形態か類纂形態か、三卷本か能因本かといった、いかにも頑迷さや固陋さをベタベタにまとつた議論に執するあまり、私たち

はひょっとして枕草子を大いに誤解してきたのではないか、自在な眼をもって臨むべき自由さを自ら手放しておいて、私たちは何とも偏頗な読みの中に枕草子をいたずらに閉塞せしめてきたのではないか、と思えてならない。

石田穰二が「諸本の本文批判について、本文の読解に基づく詳細な論議は案外に少なく、論争に至っては皆無に近い」と、「その必要を痛感する」ゆえをもって研究史を指弾してから既に四十年である。手をこまぬいてよい時期は疾うに過ぎている。

三 前田本を読む／前田本で読む

前田本を考えるうえでいずれにもまして見過ごしにできないのは、つぎの章段である。なお、本文の引用ならびに現代語訳の併記に臨んで、それに係る凡例は次のとおりである。

「凡例」

一、本文は、尊経閣叢刊丁卯歳配本『前田本枕草子』（育徳財団、一九二七）に拠り、次のような方針によって翻刻する。

- 1 仮名は現在におこなわれる字体により、漢字は常用漢字表にあるものについてはその字体を使用する。
- 2 段落を切り、句読を加点する。
- 3 会話の箇所は「」でくくり、会話文中の会話は『』でくくる。
- 4 仮名には必要に応じて漢字を当て、もとの仮名は読み仮名（ふりがな）のかたちで残す。
- 5 漢字には、必要に応じて読み仮名を（ ）に入れて付す。また場合により、漢字を仮名に開き、もとの漢字を傍記する。
- 6 当て字の類は、一般におこなわれる表記に改め、もとの当て字を傍記する。
- 7 仮名遣いは、底本のままとし、本文が歴史的仮名遣いに一致しない場合には、（ ）でそれを傍記する。
- 8 語の清濁については、近年の研究成果を参照して、これを区別する。
- 9 反復記号「、」「／」は適宜仮名に改め、当該の記号はふりがなの位置に残す。

二、現代語訳は、本文の意味するところを現代日本語表現をもって示す。

【一八五】

【本文】

身をかへたりと見ゆるもの。……A

身をかへて天人などはかくやあらむと思ふものは、ただの女房にてさぶらふ人の、御乳母になりたる、唐衣も着ず、裳をだに、よう言はば着ぬさまにて、を前に添ひ臥し、御几帳のうちを居所にて、女房どもを呼び使ひ、局にも言ひにやり、文取り次がせなどしてあるさまよ。言ひ尽くすべもあらず。……B

さう色の、藏人になりたる、いとめでたし。うちわたりに見えぬは、とあるもかかるも知らず、去年の霜月の臨時の祭に御琴持たりし人とも見えず、君達に連れ立ちてありくはいづくなりし人ぞ、とおぼゆれ。ほかよりなりたるは、をなじことなれど、さしもおぼえず。……C

藏人は、つねにつかまつりし所の大饗などしたまふぞ、甘栗の使ひにまいり、御むすめの後・女御などの御使ひに心よせをとて、まいりたるに、いみじくあなづりし女房、褥さし出でて、うちすゑたるなど、何こちすらむ。宣旨など持てまいりたれば、かうぶりにして御をびさして出であいたまふ、果報など尽きて、死なむとやすらむ、とこそ見ゆれ。……D

また、いとわびしくびむ窮なる者の、順のつかさ待つほど、従者などもなく、あやしきさまにてさまよひありくが、よき国得たるこそ、あらぬものなれ。たまさかにある男ども、わびし、ね

【通釈】

生まれ変わったと見えるもの。

生まれ変わって天人ともなればこうであるうかと思ふものといえ、一般の女房としてお仕えしている人で、御乳母になったのが、唐衣も着ず、裳をさえ、極言すれば着けないような恰好で、御前に添ひ臥して、御几帳の中を自分の居場所にして、女房たちを呼び寄せては命じ、自分の私室に用事を言いに行かせ、手紙を取り次がせなどしているようすであることよ。その威容はどうい言い尽くせそうにもない。

藏人所の役人で、藏人になったのは、とても立派である。宮中の身边近くで目にしない人のことは、仔細も分からず、去年の十一月の臨時の祭で和琴を運んでいたのと同じ人とも思えずながら、貴顕の子弟たちと一緒に連れ立って歩いているのはどこにいた人なのか、と自ずと気になるのだ。藏人所の役人以外からなつたのについては、同じ藏人だけれど、それほどには思われない。

藏人は、ふだんお仕えしていた大臣家が大饗など催しになるや、甘栗の使ひとして参上し、その家の御娘である后や女御などのお使者に配慮をいうことで、参上した際には、かつてはひどく軽視していた女房が敷物を差し出して、丁重に坐らせたのなど、どんな心地がするであろうか。また宣旨などを持参したとなれば、加冠のうえに御佩刀を差して立ち合いなさる、それはもうこれ以上の幸いはなく、死んでもよいと思つているのでは、とばかりに思われる。

また、ひどく貧しく困窮している者が、順次任期切れとなる国司の座を待つあいだ、従者などもなく、みすばらしいようすで当てもなく過していたのが、よい国の守に任ぜられたというのは、それまでにはなかった様相を見せるものである。かろうじて雇われた下男が、つらい、いまいまいと思つていても、

たしと思ながら、いかがはせむとて念じありくに、我よりまさりたる者^{もの}どもの、いかでおほせをうけたまはらむとたふれまどひ、はしりさはぎ、女房はまいり、論じ、えりもとめ、いささか見えざりし調度・装束などのわき出づるなど、めづらかなり。

……E

受領したる人の宰相になりたる、同じことなり。もとより君達^{みづから}のなりあがるよりも、あさまし。……F

前田本のこの一八五段の冒頭、Aは標目である。そのように標号するところは、すこし意をくだいて訳せば、生まれ変わったかと思われるほどに、とある存在の、身分の遷移にともなう振舞・様相上の変移のはげしいもの、くらいになろうが、この章段と対照されるべき、三巻・能因両本における当面のそれは、次のとおりである。

【三巻本】(二三二)⁽⁶⁾

身をかへて、天人などはかうやあらむと見ゆるものは、ただの女房にてさぶらふ人の、御乳母になりたる、唐衣も着ず、裳をだにもよう言はば着ぬさまにて、御前に添ひ臥し、御帳の内を居所にして、女房どもを呼び使ひ、局にものを言ひやり、文を取り次がせなどしてあるさま、言ひ尽くすべくもあらず。

雑色の、藏人になりたる、めでたし。去年の霜月臨時の祭に御琴持たりしは、人とも見えざりしに、君達と連れ立ちてありくは、いづこなる人ぞと、おぼゆれ。ほかよりなりたるなどは、いとさしもおぼえず。

どうにもできないと堪えつづけていたのが、自分よりも何につけ優っている者たちが、なんとかして仰せを承りたいと平身低頭し、声をはりあげて動きまわり、女房は参集するようになり、話し合い、選んで調達し、それまで家の中に少しも見えなかった調度品や装束などが湧き出るように次々に新調されてゆくなど、めったにない光景である。

受領を歴任した人が宰相になったのも、同様だ。もともと将来が約束されている権門の子弟が昇進したのよりも、意外に思われるものである。

【能因本】(二四二)⁽⁷⁾

身をかへたらむ人はかくやあらむと見ゆるものは、ただの女房にて候ふ人の、御乳母になりたる。唐衣も着ず、裳をだに、よう言はば、着ぬさまにて、御前に添ひ臥して、御帳のうちをゐ所にして、女房どもを呼び使ひ、局に物言ひやり、文取り次がせなどして、あるさまよ。言ひ尽くすべくだにあらず。

雑色の藏人になりたる。去年霜月の臨時の祭に、御琴持たりし人とも見えず、君達に連れ立ちてありくは、いづくなりし人ぞとこそおぼゆれ。ほかよりなりたるなどは、同じ事なれど、さしもおぼえず。

見られるとおり、それぞれに「身をかへて、天人などは…」、「身をかへたらむ人は…」と始発する両本は標目を持たず、前田本ではBとCにあたる、「乳母」と「蔵人」とに係る内容を有するばかりである。

さて、DとFについてはどうか。次を見られたい。

【三巻本】（二八〇）

したり顔なるもの

正月朔日に、最初にはなひたる人。よろしき人は、さしもなし。下臈よ。

きしろふたびの蔵人に、子なしたる人のけしき。また、除目に、その年の一の国得たる人。よろこびなど言ひて、「いとかしこうなりたまへり」など言ふ答へに、「なにかは。いと異様にほろびてはべるなれば」など言ふも、いとしたり顔なり。

また、言ふ人多く、いどみたる中に、選りて婿になりたるも、我はと思ひぬべし。

受領したる人の、宰相になりたるこそ、もとの君たちのなりあがりたるよりも、したり顔に、け高う、いみじうは思ひためれ。

【能因本】（二八三）

したり顔なるもの 正月一日のつとめてさいそに鼻ひたる人。

きしろふたびの蔵人に、かなしう子なしたる人のけしき。除目に、その年の一の国得たる人の、よろこびなど言ひて、「いとかしこうなりたまへり」など人の言ふいらへに、「何か。いとことやうにほろびて侍シなれば」など言ふも、いとしたり顔なり。

言ふ人おほく、いどみたる中に、選られて婿に取られたるも、われはと思ひぬべし。こはき物の怪調じたる験者。みふたぎの明け、とうしたる。小弓射るに、片つ方の人、しはぶきをしまぎらわしてさわぐに、念じて、音高う射て当てたるこそ、したり顔なるけしきなれ。碁を打つに、さばかりと知らで、ふくつけさは、またこと所にかかぐりありくに、こと方より目もなくして、おほく拾ひ取りたるも、うれしからじや。ほこりかにうち笑ひ、ただの勝よりはほこりかなり。

ありありて、受領になりたる人のけしきこそうれしげなれ。

わづかにある従者もなめげにあなづりつるも、ねたしといかがせむとて、念じ過ぐしつるに、われにもまさる者どものかしこまり、ただ「仰せうけたまはらむ」とついじゆうするさまは、

そう、Eは、ともに「したり顔なるもの」に始まる章段の能因本のほうの傍線部と、Fは、三巻本のほうの傍線部と、それぞれ類同なのであった。

では、残るDはといえば、これは三巻本・能因本ともに「めでたきもの」の段の一部に、似通う本文が見える、といった次第なのである。

【三巻本】〔八四〕

めでたきもの

唐錦。飾り太刀。作り仏のもくゑ。色あひ深く花房長く咲きたる藤の花、松にかかりたる。

六位の蔵人。いみじき君たちなれどえしも着たまはぬ綾織物を、心にまかせて着たる青色姿などの、いとめでたきなり。所の雑色、ただ人の子どもなどにて、殿ばらの侍に、四位、五位の司あるが下にうちゐて、なにとも見えぬに、蔵人になりぬれば、えも言はずぞあさましきや。宣旨など持てまゐり、大饗のをりの甘栗の使などにまゐりたる、もてなし、やむごとながらたまへるさまは、いづこなりし天降り人ならむとこそ見ゆれ。御女、后にておはします、また、まだしくて姫君など聞ゆるに、御書の使とてまゐりたれば、御文取り入るるよりはじめ、茵さ

ありし人とやは見えたる。女方には優なる女房うち使ひ、見えざりし調度、装束のわき出づる。受領したる人の、中將になりたるこそ、もと君達のなりあがりたるよりも、けだかう、したり顔に、いみじう思ひたしめれ。

【能因本】〔九二〕

めでたきもの 唐錦。飾り太刀。作り仏のもくゑ。色合ひよく、花房長く咲きたる藤の、松にかかりたる。

六位の蔵人こそなほめでたけれ。いみじき君達なれども、えしも着たまはぬ綾織物を心にまかせて着たる青色姿などの、いとめでたきなり。所衆、雑色などの、人の子どもなどにて、殿ばらの四位五位も司あるがしもにうちゐて、何と見えざりしも、蔵人になりぬれば、えも言はずぞあさましくめでたきや。宣旨持てまゐり、大饗の甘栗の使などにまゐりたるを、もてなしきやうようしたまふさま、いづこなりし天くだり人ならむとこそおぼゆれ。

御むすめの女御、后おはします、また、姫君など聞ゆるも、御使にてまゐりたるに、御文取り入るるよりうち始め、褥さし

し出づる袖口など、明暮見し者ともおぼえず、下襲の裾引き散らして、衛府なるは今すこしをかしく見ゆ。御手づから盃などさしたまへば、わがここちにもいかにおぼゆらむ。…（以下、略）…

かく、他本における他の章段の一部とも共通する部分を有する体で一八五段「身をかへたりと見ゆるもの」を書きつらねたのが前田本であるとして、ならば、前田本自体の「したり顔なるもの」や「めでたきもの」は、それこそいかようであったのが、必然的に問われることになろう。

「二七九」

したり顔なるもの。

正月ついたちのつとめて、最初に鼻ひたる人。きしろうたびの蔵人に、愛しくする子なしたる。人のけしき集め、他にかちたる人。韻塞の明かしたる。強き物の怪調じ得て、わづらふ人やめたる験者。

除目に、その年の一の国得たる人の、よろこびなど言ひて「いとかしこくなりたまへり」など人の言ふ答へに、「何か。いとことやうにほろびてはべるなれば」など言ふも、したり顔なり。言ふ人多く、いどみたるなかに、選りて婿にとられたるも、我はと思ぬべし。小弓射るに、片つ方の人しはぶきをし、まぎらはしきはぐに、念じて、をなじきものをこと高う射当てたるこそ、したるけしきなり。碁を打つに、さばかりぞとし得て、ふくつけさはまた異所にかかづりありくに、異方より、目もなく

出づる袖口など、明け暮れ見し者ともおぼえず。下襲の尻引き散らして、衛府なるは、いますこしをかしう見ゆ。みづから杯さしなどしたまふを、わが心にもおぼゆらむ。…（以下、略）…

「二〇八」

めでたきもの。

唐錦。飾り太刀。作り仏の木画。色合ひよく、花房長く咲きたる藤の、松にかかりたる。

六位の蔵人こそ、なをめでたけれ。いみじき君達なれどもえしも着たまはぬ綾をり物を、心にまかせて着たる青色姿などのいとめでたきなり。所のざう色の、ただの人の子どもなどにて、殿ばらの侍に、四位・五位・六位も、司あるが下にうちゐて何とも見えざりし、蔵人になりぬれば、えもいはずぞ、あさましうめでたき。宣旨持てまいり、大饗のをりの甘栗の使などにまいりたるをもてなし饗応したまふさまは、いづくなりし天降の人ならむとこそおぼゆれ。御むすめの女御・后にてをはします、また、姫君などきこゆるにも、御使にてまいりたるに、御文とり入るる袖口よりはじめて、褥さし出づるほどなど、明け暮れ見

して拾^{ひろ}い取りたるもうれしからじや。誇^{ほこ}りにうち笑^{わら}ひたる、
ただの勝^かちよりは誇^{ほこ}りかなり。

見てのとおりである。前田本の「二七九」「したり顔なるもの」には、三巻・能因両本の同名章段の傍線部の記述内容は、悉皆ふくまれてはいない。また、一方の「二〇八」「めでたきもの」は、三巻・能因両本の同名章段と、標目ゆえに当然といえは当然の、いま右に波線を施してみた「めでたし」の語の配置を始めとして悉皆同断の構えなのであった。されば、いま改めて、「一八五」は「身をかへたりと見ゆるもの」のDの、「蔵人」ないし「甘栗の使」を旨とする記述は、前田本内にあつて「二〇八」と重複しているとの譏りを免れぬのであろうか。Cからの流れとともにDを再び引いてみたい。併せて、かの楠が、能因本とともに前田本の底本であるとした堺本を、ここで引いてみる。

【一八五】

身をかへたりと見^みゆるもの。……A

(中略)

ざう色^{(ふ)しき}の、蔵人^{くら}になりたる、いとめでたし。うちわたりに見えぬは、とあるもかか^しるも知らず、去年^{こぞ}の霜月^{しもつき}の臨時^{りんじ}の祭^{まつり}に御琴持^{みことも}たりし人とも見^みえず、君達^{みだち}に連れ^つ立ちてありくはいづくなりし人ぞ、とおぼゆれ。ほかよりなりたるは、を^(お)なじことなれど、さしもおぼえず。……C

蔵人は、つねにつかまつりし所の大饗^給などしたまふぞ、甘栗^{あまぐり}の使^{つか}ひにまいり、御むすめ^{おほむすめ}の後^{きさき}・女御^{おほみ}などの御使^{つか}ひに心よせをとて、まいりたるに、いみじくあなづりし女房^{おんなばう}、褥^{しとね}さし出^いでて、

し者^{もの}ともおぼえず、下襲^{したふぎ}の裾^{しりひ}引き散^ちらして、衛府^{ゑふ}なるは、いますこしおか^(お)しう見^みゆ。御手^てづから盃^{さかずき}さしなどしたまふ、我心^(こころ)にも、いかにおぼゆらむ。…(以下、略)…

【堺本】「二八」⁽¹⁰⁾

身をかへたりと見^みるもの。…(中略)…さてはまた、ざう色^{(ふ)しき}の、蔵人^{くら}になりたる。一の人の御^ごもとに、宣旨^{せんじ}持^もてまいり、大饗^(お)のおりの天降^{あまた}りの使^{つか}などにまいりたるを、もてなし、やむことながらせたまふさまなど、いづくなりし天降^{あまた}りの人ならむとこそ見^みゆれ。また、又^{また}、むすめの、后^{きさき}・女御^{おほみ}などにておはします所に、使^{つか}にまいりたるに、御文^{ごふみ}とりいるる袖口^{そでぐち}よりはじめて、褥^{しとね}さしいづるほどなども、蔵人^(くら)・六位侍^(むろ)などの台盤^{たいばん}所に、四位^{よん}・五位^ごさらなり、六位もことなることなきものどもなれども、司^{つかさ}あるは上^{かみ}にて、むげの末にゐたるはあさましうあなづらはしく見えしもの、とぞ見^みえぬかし。下襲^{したふぎ}の裾^{しりひ}引き散^ちらして、衛府^{ゑふ}なる

うちすゑたるなど、何^{なに}こ^こちすらむ。宣旨^{せんし}など持^もてまいりたれば、かうぶりして御^おをびさして出^いであいたまふ、果報^{くわう}など尽^つきて、死^しなむとやすらむ、とこそ見^みゆれ。……D

はいますこしをかしかめり。御手づから出^いであひて盃^{さか}などさしたまふは、我心^{わがこころ}地^ちにも、いかがはおぼゆらむ。…（以下、略）

さて、いかがであろう。堺本の本文は、一部に理解なめらかならざる部分を抱えるが、その表現・行文の多くは、明らかに、先に引いた三卷・能因両本の「めでたきもの」のそれらと重なる。むろん、そうでありながらも、「めでたきもの」ではなく「身をかへたりと見るもの」に「ふさわしい話題として扱^いい、「問題なく読める」ように、「堺本は堺本の論理でもって適切な場所に配^いしている」とは考えられよう。だが、それはむしろ、右の前田本は「一八五」のC・Dにこそ与えられるべき評言であろう。これまで、外ならぬそのC・Dは前田本内での「重複^⑫」として捉えられ、「めでたきもの」の文を誤つて収めたのであらう」とまで説かれてきたことは、今こそ大いに省みられねばなるまい。少なくとも「一八五」に、「伝能因本と堺本とを底本として集成して作られた」との見立ては当て嵌まらないのである。「一八五」で「身をかへたりと見るもの」として俎上にのぼせられた条項それ自体は「一〇八」の「めでたきもの」に既に挙例されたものと重なるとしても、表現は、片や「めでたきもの」との標目のもとで、もう一方は「身をかへたりと見るもの」なるそれのもとで、しかと自立して生きられるよう、有機的に調えられていたことを見届けるべきである。^⑭

尤も、その「表現」については、「雑纂」という形態の生成と同様に「類纂」という形態のそれが、紛れもなく清女その人の手によつておこなわれたという一事が保証されぬうちは、たとえば、「明かに作者を離れたものである」^⑮との負の評価も甘んじて聞き入れるべきこと当然である。その一方で、万が一にも右の「一事」の可能性がのこるかぎりには、私たちは前田本を、あるいは前田本の「表現」を、やはり当然に、たやすく手放すべきではないのではあるまいか。その意味で、能因本や堺本から本文を適宜に奪取し安直な再配置^{パッチワーク}を繰り返したかのような印象を前田本に貼付しつづけることは、早くに過去のものとしなければなるまい、そう強く願うばかりである。

以下、ひきつづき、前田本を特徴づけるいくつかの章段を取り上げておく。本文は長短、事柄は大小、それぞれさまざまにわたるが、諒とされたい。なお、他本の本文状況の一々は、煩瑣を避けてその掲出は割愛に従い、章段番号のみ示しておく。諸賢、よろしく参照されたい。

【一一一】【三】【三九】／【能】【四九】／【堺】【一七五】

【本文】

あてなるもの。^物

薄色^{うすいろ}に白襲^{しろがね}の汗衫^{あせみ}。かりのこ割りたる。削り氷^{けうりひ}に甘葛^{あまづわい}入れて、あたらしき鉢^{かたまり}に入れたる。いみじくうつくしき児^このいちご食ひたる。梅^{うめ}の花^{はな}に雪^{ゆき}の降りたる。

水晶^{きうすい}の数珠^{ずじゆ}。つき影^{かげ}。藤^{ふぢ}の花^{はな}。

「かりのこ割りたる」の一文は、貴重である、と言うべきだろう。実は、「二〇九」「うつくしきもの」の段に、「かりのこのうち」とあって、卵の段階、の意に解し得るのだが、ここはいよいよ孵化のときを指し示しているのだろう。雁や鴨など水鳥のひなが誕生すべく卵が割れた段階を「あて」と評したのである。他本はいずれも「かりのこ」とのみ。前田本の価値が光る。

【一一五】【三】【二六一】／【能】【二五四】／【堺】【二五二】

【本文】

うれしきもの。^物

まだ見ぬ物語^{ものがたり}の多^{おほ}かる。また、一^{ひとつ}を見て、いみじうゆかしうおぼゆる物語^{ものがたり}の二^{ふたつ}見つけたる。心^{こころ}をとりするやうもありかし。

人の破^やりて捨てたる文^{ふみ}を、継^つぎて見たる。

いかならむと思ふ夢^{ゆめ}を見て、おそろしと胸^{むね}つぶるるに、こ
とにもあらず合^あはせなしたる、いとうれし。

【通釈】

貴く美しいもの。

薄紫色^{むらさき}の裯^{あめ}に表裏とも白色^{しろ}の汗衫^{あせみ}。水鳥^{みづとり}の卵^{たまご}が割れたの。削った氷^{けうりひ}に甘葛^{あまづわい}の汁^{じゆ}を煮詰めた甘い汁^{じゆ}を入れて、新しい金属^{きんぞく}の椀^{わん}に入れたる。たいそう可愛い幼児^{こども}がいちごを食べているの。白梅^{はくばい}の花^{はな}に雪^{ゆき}が降りかかっているの。

水晶^{きうすい}の数珠^{ずじゆ}。月の光^{ひかり}。藤^{ふぢ}の花^{はな}。

【通釈】

うれしいもの。

まだ読んだことのない物語が多いの。また、一冊目を読んで、とてもつづき
が読みたいと思えてならない物語の二冊目を見つけたの。(実際に読んでみると
がっかりすることもあるのだが――)。

人が破いて捨てた手紙を、もとのように復元して読んだの。

どうなるのだろうかと思ふ夢を見て、恐ろしいことだと胸がつぶれるような
思いでいる時に、たいしたことないものと夢判断してくれたのは、とてもう
れしい。

よき人の御前に人びとあまたさぶらふ折に、昔ありけることにもあれ、今聞こし召し、世に言ひけることにまれ、語らせたまふを、我に御覧じ合はせてのたまはせ合はせ、聞かせさせたまふ、いとうれし。

とをき所はさらなり、同じ都のうしながら、やむごとく思ふ人のなやむを聞きて、いかにいかにとおぼつかなく思歎くに、をこたりたる消息得たるもうれし。

思ふ人の、他人にもほめられ、やむごとなき人などの、くちをしからぬ者にをぼし、のたまふ。また、ものの折、もしは人と言ひかはしたる歌の聞こえて、ほめられ、打聞などに書かる。自らの上にはまだ知らぬことなれど、思やらるるかし。

いたくうちとけたらぬ人の言ひたる古き言の、知らぬを聞き出でたるも、うれし。後に物の中などより見つけたるは、をかし。ただ、かうにこそありけれ、と、かの言ひたりし人ぞ、をかしき。

色紙・薄様はさらなり、陸奥国紙、またただのも、白うきよげにをもてうるはしき得たる、いとうれし。

はづかしき人の、歌の本末問ひたるに、ふとおぼえたる、我ながらうれし。常におぼゆることも、また人の問ふには、きよく忘れてやみぬる折ぞ、多かる。

すぐれた人（中宮様）の御前に女房たちが大勢お控えしている時に、昔あったことであれ、世間で話題になったことであれ、今お聞きになり、お話しになるにつけ、目と目を見交わし言葉と言葉を言い交わして、わたしに聞かせなさるの、ほんとうにうれしい。

遠い所は言うまでもなく、同じ都の中でも、自分にとって特別に大切に思う人が病気で苦しんでいるのを聞いて、病状はどうかとやきもき歎き悲しんでいるときに、治った旨の手紙を手にしたのも、うれしい。

好きな男が、他人にも誉められ、高貴な方などが、（その男のことを）かなりな人物だとお考えになり、公言なさるの。また、何かこれといった催しの時の和歌、もしくは誰かと詠み交わした和歌が評判になって、誉められ、誰かの秀歌録に書き入れられるの。わたし自身のこととしては経験がないことだけれど、おのずと想像はつくことであるよ。

あまり親しくない人が口にした古歌で、知らないのを聞き知ったのも、うれしい。あとで或る書物の中などから見つけたときは、最高だ。まさに、こうであった、と、その口にした人のことが、興味深く思われる。

色紙・薄様は言うまでもなく、陸奥国紙、あるいはごく普通のでも、白くきれいで表面が美しい紙をもらったのは、心からうれしい。

こちらが身構えてしまう立派な人が、和歌の上の句あるいは下の句を問いかけてきたときに、すつと頭に浮かんだというばあいは、我ながらうれしい。ふだん覚えている歌でも、改めて問いかけてくるに際しては、きれいさっぱり忘れて答えられないままになってしまう時が、多いものだ。

急ぎの探し物を、見つけ出したの。今すぐに読まねばならない本を蔵い失くして、そのあたりのすべての物をひっくり返すようにして何度も探しているうちに、ついに見つけ出したのは、ほんとうにうれしい。

とみの求むる物、見出でたる。ただ今見るべき文などを、求めうしないて、よろづの物をかへすがへす見るに、探し出でたる、いとうれし。

物合、何くれの挑むこと、勝ちたる、いかでかはうれしからざらむ。また、いみじう我はと思ひてしたり顔なる人の、謀り得たる。女どちらよりも、男は、まさりてうれし。これがたうはかならずせむと思らむと、常に心づかひせらるるをかしきに、いとしれなく、何とも思たらぬさまにてたゆみ過ぎずも、をかし。

にくき者のあしき目みたるも、罪や得らむと思ながら、うれし。

ものの折に、衣打たせにやりて、いかならむと思ふに、きよらにて得たる、いとうれし。挿櫛磨らせたるに、をかしげなるも、またうれし。

日ごろ月ごろなやみたるが、おこたりたるも、いとうれし。

思ふ人のうゑは、我身よりも、うれし。

また、さるべき人などに仰せ言たまはせむとて、下なるをわざと召して仰せらるるも、をもだたし。物隔て、すこし遠くてももの言ふを聞くに、さも答へばやと思ふことを、近き人の言ひたるこそ、あいなううれしけれ。

四月一日ごろに、ほととぎすの声、まづ聞きそめたる。

貝合・根合・絵合……などの物合、あれやこれやの勝負事、それらに勝ったのは、どうしてうれしくないことがあるうか。また、ことのほか自惚れを抱いて得意然としている人の、謀略に成功したの。女同士よりも、男のばあいには、いつそううれしい。この仕返しはきつとしてやると思っているだろうと、常日ごろ自然と用心深くなるのもおもしろいが、いかにもさりげなく、なんとも思っていないふうをよそおって気をゆるめて過ごすのも、おもしろい。

憎らしい人がひどい目にあうのも、(人の不幸を喜んだりしたら) 仏罰をこうむるのではないかと思いつつ、うれしい。

何かの催しに際し、着物を打たせにやって、どうなるかと思っていたところ、きれいに仕上がって手にすることができたのは、とてもうれしい。挿櫛を磨らせたところ、よい感じに仕上がったのも、これまたうれしい。

何日も何か月も病気で苦しんでいたのが、治ったのも、ほんとうにうれしい。愛する人の身に関わるばあいには、自分のことよりも、うれしい。

また、相当な身分の人に中宮様がご伝言を差し上げるということで、局にいる女房を特別にお呼び寄せになってご指示をお与えになるのも、(受ける女房としては) 名誉なことだ。調度類を隔てて、すこし遠くから人がぶつくさ言うのを聞くにつけ、こんなふうにあしらってやりたいと思っていることを、近くの人がまさに口にしたのは、もう理屈抜きでうれしい。

四月一日ごろに、ほととぎすの声を、まづ先に聞きはじめたの。

好きな人の子をいよいよ産むという段になって、どうなることか、どうなる

思ふ人の子産むべきに、いかならむ、いかならむと、わびしく、おそろしく思に、^(おもふ)たいらかにしたる。^(①)
を前に、人びと、所もなくゐたるに、いま上りたれば、すこしきとをき柱のもとなどにゐたるを、ふと御覧じつけて、道あけて、近う召し寄せられたるこそ、うれしけれ。

ことかと、つらく、こわいと思っていると、無事に出産したの。
中宮様の御前に、大勢の女房たちが、隙間もないくらいに坐っているのに、自分はたったいま参上したので、すこし離れた柱のあたりなどに坐っていたところ、中宮様がすぐにお目にとめて、道をあけて、おそば近くにお呼び寄せになったのは、うれしいことである。

本文8行目からのくだり、「よき人の御前に人びとあまたさぶらふ折に、昔ありけることにもあれ、今聞こし召し、世に言ひけることにまれ、語らせたまふを、我に、御覧じ合はせてのたまはせ合はせ、聞かせさせたまふ、いとうれし。」は、三巻本との間に、微妙な、しかし少なくない異同を有していることもあり、一見、理解の難しさを感じさせる。けれども、そこに、

昔ありけることにもあれ

聞こし召し

ご覧じ合はせ

世に言ひけることにまれ

語らせたまふ

のたまはせ合はせ

と、整然と並べ得る対構造が厳存していることに気づかされるとき、文脈理解への展望は一気に開けよう。

すなわち、中宮は、「昔ありけること」、「世に言ひけること」、そのどちらについても聞き、また語る、しかも、その際に、自分が清女を見るのと同等に清女が自分を見ることを許し、自分が清女に語るのと同等に清女が自分に語ることを許すという、清女との主従という関係を超えて「人間」としての対等を認める中宮の器量をしかと指し示す文脈が、表現の基部を支えていたことを知り得るだろう。

翻って、そういう構造を有して今日に伝わる前田本の価値を、改めて思わずにはいられない。少なくとも当該については、前田本のそうした表現を把握し得なかった何人かによって改変された、いや、端的に言えば改悪へと貶められたのが三巻本や能因本の本文であって、三巻本や能因本文をいたずらに増益せしめたのが前田本、という関係では決してあるまい、と考えるのである。

【本文】

はづかしきもの^物。

男^{おとこ}の心のうち。寝^いざとき夜^よひの僧^{そう}。みそか盗^{ぬす}人、さるべき隈^{くま}々に隠^{かく}れゐていかに見^みるらむ、誰^{たれ}かは知^しらむ。暗^{くら}きまぎれに、しのびやかに物^{もの}盗^とる人もあらむかし。それはしも、同じ^{おな}心に、をかしとや思^{おも}らむ。

夜^よ居^ゐの僧^{そう}は、いとはづかしきもの^物。若^{わか}き人^{あつ}の集^{あつ}まりゐて、人^{うへ}の上^{うへ}を言^いひ笑^{わら}ひ、そしりにくみもするを、つくづくと聞^きき集^{あつ}むるも、はづかし。「あな、うたて、かしこまし」など、御^{まへ}前^{ちか}近^かき人^{ひと}びとのけしきばみ言^いふをも聞^きき入^いれず、言^いひ言^いひの果^はては、みなうちとけて寝^ねめるのちも、はづかし。

男^{おとこ}は、うたて思^{おも}さまならず、もどかしう心^{こころ}づきなきことありと見^みれど、さし向^むかひたる人^{ひと}を、すかし頼^{たの}むるこそ、はづかしけれ。まして、情^{なさけ}あり好^{この}ましく人に知^しられたる人^{ひと}などは、をろかなめりと思^{おも}ふべくもてなさずかし。心のうちにのみもあらず、また、みな、これがこととはかれに語^{かた}り、かれがことはこれに語^{かた}りなどするを、我^{わが}ことをば知らで、かく語^{かた}るはこよなき、などか、と思^{おも}やすらむ。いで、あはれ、また会^{あひ}はじと思^{おも}ふ人^{ひと}にあらば、心^{こころ}はなきものなめりと見^みえて、はづかしうもあらぬもの

【通釈】

恐れ入るもの。

男^{おとこ}の心のうち。耳^{みみ}聴^{きこ}く起^{おこ}きる夜^よ居^ゐの僧^{そう}。こそ泥^{どろ}が、しかるべきそここの物陰^{ぶつかげ}に身^みをひそめて家^{いえ}内^{うち}をどう見^みているかなど、誰^{たれ}が分^わかるうか。夜^よ陰^{かげ}に乗^のじて、こつそりと他人^{たにん}の物^{もの}を盗^{ぬす}る人もいるだろうよ。それこそは、自分^{じぶん}と同じ^{おな}心理^{しんり}によるものと、おもしろいと思^{おも}つてこそ泥^{どろ}は見^みているだろうか。

夜^よ居^ゐの僧^{そう}は、それは恐れ入る存在^{そんざい}。若^{わか}い女^{にょ}房^{ぼう}が集^{あつ}まつていて、人^{ひと}のことを噂^{うさ}したり笑^{わら}いものにしたたり、非^ひ難^{なん}したり憎^{にく}んだりするのを、じいっと聞^きいてことごとく心に留^{とど}めるとは、恐れ入る。「あら、いやだ、静^{しず}かになさい」などと、中^{ちゆう}宮^{ぐう}のおそば近くに控^{ひか}える女^{にょ}房^{ぼう}たちが敢^あえてつつまず注意^{ちゆうい}するのも聞^きき入^いれず、しゃべり散^{さん}らしたあげくには、みな氣^きを許^{ゆる}してだらしく眠^ねりこけたその後も、僧^{そう}はどう思^{おも}うだろうかと氣^きが置^おける。

男^{おとこ}というものは、どうしたことかひどく自分の理想^{りしきやう}からかけ離^{はな}れ、じれったく氣^きにくわぬ点^{てん}があると思^{おも}つていても、面^{おもて}と向^むかった女性^{じゆうせい}については、おだててその氣^きにさせるといふのは、恐れ入る。まして、情^{なさけ}愛^{あい}があり色^{いろ}好^{この}みとして世間^{せけん}からの評判^{へいぱん}を得^えている男^{おとこ}などは、この男^{おとこ}はわたしへの愛^{あい}情^{じゆう}が薄^{うす}いようだと思^{おも}うようには振^ふる舞^まわないことよ。心^{こころ}の中でだけ思^{おも}っているのでもなく、さらに、洗^{せん}いざらい、こちらの女^{にょ}の悪^{あく}口^{くち}はあちらの女^{にょ}に語^{かた}り、あちらの女^{にょ}の悪^{あく}口^{くち}はこちらの女^{にょ}に語^{かた}りなどするようなのに、自分^{じぶん}の悪^{あく}口^{くち}が他人^{たにん}に語^{かた}られているのも知らずに、こんなにも別の女^{にょ}の悪^{あく}口^{くち}をわたしに語^{かた}ってくれるのは格^{かく}別^{べつ}にわたしのことを……、なんでだろう、それはきつと……、とこの世^よの女性^{じゆうせい}は思^{おも}つたりしているのだろうか。いやはや、あああ女^{にょ}とは、もう二度と会^{あひ}うまいと思^{おも}

ぞかし。いみじうあはれに心苦しげに見捨てがたきことなどをいささかとこそ、何ともえ思はぬもいかなる心ぞとこそ、あさましけれ。さすがに、人の上をばもどき、ものをよく言ふよ。ことに頼もしき人などもなき宮仕へ人などをかたらひて、ただにもあらずなりぬるありさまなどを、きよう知らでなどもあめるは。

うそういう男であるならば、この男には思いやりが無いようだとか分かって、気がひけることなどないものなのだ。いったい男は、女がたいそう気の毒で痛々しそうで見捨てられそうにないことなどこれっぽっちも気にはしないのかと、あるいはそういう女の何を何とも思いやれないのはいかなる心根なのかと、あきれるばかりだ。それなのに、他人のことは非難し、自分のことは弁舌も巧みに飾りたてることよ。とくに頼りになる人などもない女房風情の女をくどいておいて、身重になったあとの女の事情などは、きれいさっぱり関知してもないふりをしてなどいるようであるよ。

本文後ろから8行目、「いで、あはれ」と始まる一文については、三卷本「いで、されば、すこしも思ふ人にあへば、心はかなきなめりと見えて、いとほかしうもあらぬぞかし」、能因本「いで、あはれ、またあはじと思ふ人にあへば、心はなきものなめりと見えて、はづかしくもあらぬものぞかし」と、相応の異同が存する。三卷本は「すこしも思ふ人にあへば」と「心はかなきなめりと見えて」との掛かり承けが必ずしも滑らかには成り立たぬ憾みが遺り、三卷・能因両本通有の「…にあへば」は、ほんとうにそれだけで「…と見えて」という結果を担保し得るのかどうか、言を換えれば、「あへば」はほんとうにプロパー本文なのかどうか、疑義が残ろう。前田本の「…にあらば」は、改めて考慮されてよいように思われる。

また、次の、「いみじうあはれに」に始まる一文についても、前田本特有の「…とこそ、…とこそ」との構文が把握されなかった結果が、三卷本や能因本の本文を出来せしめたように思われてならないのである。現行の諸校注本の作る、一つの文脈における「いささか」と「なにとも」もしくは「なにごととも」との並存は、やはり一種の言語矛盾をきたしていることに気づくべきだろうと考える。

【一四二】【三】【九四】／【能】【一〇三】／【堺】【一一四】

【本文】

くちをしきもの。^物

【通釈】

期待はずれでがっかりするもの。

五節・御仏名に雪の降らで、雨かきくらし降りたる。節会などさるべきをりの、御物忌にあたりたる。いどみ、いといつかと思たることの、さはること出で来て、にはかにとまりたる。いみじう欲しうする人の、子産まで年ごろ過ぐる。遊びをもし、見すべきことありて、かならず来なむと思て呼びにやりたる人の、「障ることあり」など言ひて来ぬ、いとくちをし。

おとこも女も、宮仕へ所より、同じやうなる人などもろともに、寺へも詣で、ものへも行くに、好ましくばれ出で、よう言はばけしからず、あまり見苦しとも見つくぞあるに、さるべき人の馬にても車にても行きあいたるはよし、見ずなりぬる、いとくちをし。わびては、すきずきしからむ下衆などにも、人に語りつべからむ者がな、と思も、けしからぬなりかし。

本文8行目、「おとこも女も」から始まる一文の、殊に「よう言はば」以下は、三巻本では「よういよくいは、けしからず」、能因本では「よういはけしからず」に作るが、諸注において解釈は多岐に分かれる。ただ、「ようい（用意）」の語は、それを「趣向」と解さねばならぬ窮屈さを、百歩譲って受け容れるとしても、文脈内での坐りの悪さは拭いがたいように思われ、そもそも前田本の伝える「よういは、」なる文字列への無理解に由来する改竄本文なのではあるまいか、との思いを禁じ得ない。ちなみに、その使用頻度寡少なる「よういは、（よう言はば）」は、枕草子にあっては、実は先に見た〔一八五〕（＝三巻本〔二二二〕、能因本〔二四二〕）にしろうじて使われてい、それをも含めてかれこれ検討考量をかさねた田中重太郎によって、その意は「極言すれば」といった程度に解すべきことが説かれているが、ともあれ、その表現を両所に確かに伝え来った前田本文は、改めて見つめられてよいように思われる。

十一月の五節や十二月の御仏名に雪が降らないで、雨があたり一面を暗くして降っているの。節会など然るべき儀式の日が、宮中の御物忌と重なっているの。競って、とにかく早くにと思つていたことが、支障が生じて、急に取り止めたくなったの。

子をとでも欲しがっている人が、産まないまま何年も過ぎてしまうの。管絃の遊びもしたかったり、見せたいものがあつたりで、必ず来てくれるだろうと思つて呼びにやった人が、「都合が悪くて…」などと言つて来ないのは、とてもがっかりだ。

男でも女でも、お仕えしている所から、同僚などと一緒に、お寺へ参詣したり、どこぞへ出かけて行ったりする折に、心惹かれるほどに出だし衣があらわになつて、極言すれば異様で、見苦しすぎるとも見られてしまいそうなほどであるのに、それ相応に理解のある人が馬に乗つてであれ車に乗つてであれ途中で行きあつたという場合はよいとして、会わずじまいになつてしまうのは、ほんとうにがっかりだ。がっかりしたからは、風流心のありそうな身分の低い者でも、人に必ず噂してくれそうな者が現れてほしいなあ、と思うのは、まともではないわね。

【本文】

すさまじきもの^物。

昼^{ひる}ほゆる犬^{いぬ}。春^{あじろ}の網代^{あじろ}。三・四月の紅梅^{こうばい}の衣^{きぬ}。ちご亡^なくなりたる産屋^{うぶや}。火^おをこさぬ炭櫃^{すびつ}・火桶^{(20)をけ}・地火^ち・火^ろ。

持経^{こみ}者の、声^{こゑ}なき。牛死^{うし}にたる牛^{うし}かい。博士^{はかせ}の、うちつづき女子^{うし}産^うませたる。方違^{かたが}へに行きたるに、あるじせぬ所^い。まして、節^{せち}分^{ぶん}などは、いとすさまじ。

ゐな^中か^およりをこせたる文^{ぶん}の、物^{もの}なき。京^{きやう}のをまさこそは思^{おも}らめ、されどそれは、ゆかしきことどもをもかき集^{あつ}め、世^よにあること^事などをも書^かけば、よし。

人^{ひと}のもとにわざときよげに書^かきたててやりたる文^{ぶん}の返^{かへり}事^{こと}、いつしか見^みむ、今は持^もて来^きぬらむかし、あやしうをそきと待^{まち}つほどに、ありつる文^{ぶん}を、立^{たて}文^{ぶん}も結^{むす}びたるも、いときたなげにとりなしふくだめて、表^{うへ}に引^ひきたりつる墨^{すみ}さへ消^きえたるを、「を^おはさざりけり」、もしは「物忌^{いみ}とて取り入^いれず」など言^いひて持^もてかへりたる、いとわびしうすさまじ。

また、かならず来^くべき人^{ひと}のもとに迎^{むか}へに車^{くるま}をや^りて待^{まち}つに、入^いり来る音^{おと}すれば、「さななり」と、人^{ひと}びと出^いでて見^みるに、車宿^{くるまやど}さまにやり入^いれて、轆^{なぐさ}ほうとうちをろすを、「いかなるぞ」と問^とへば、「今日^{けふ}はおはしまさず」とて、牛^{うし}のかぎり引^ひき出^いでて往^いぬる。

【通釈】

不調和で興^{きよう}ざめするもの。

昼間^{ひるま}吠^いえる犬^{いぬ}。三・四月の紅梅^{こうばい}襲^{せう}の着物^{きもの}。赤ん坊^{あかちゃん}の死^しんでしまった産室^{さんしつ}。火^かを熾^{さか}さない炭櫃^{すびつ}や火桶^{ひおけ}、あるいは地火^{ぢか}・火^か。

法華經^{ほふくきやう}を受^う持^ぢし説誦^{せつじゆ}を専^{せん}らとする者^{もの}が、声^{こゑ}が美^{うつく}しくないの。牛^{うし}の死^しんでしまった牛飼^{うし飼い}い。男系^{おとぎ}の職種^{しやくしゆ}たる博士^{はかせ}が、たてつづけに女^めの子^こを儲^もけたの。方違^{かたが}えに行^いつたのに、ご馳走^{ちしゆ}してくれない家^{いへ}。まして、節季^{せつき}變^へわりのご馳走^{ちしゆ}をふるまうのが通例^{つうれい}の節分^{せぶん}の場合^{ばあひ}などは、ほんとうに興^{きよう}ざめた。

地方^{ちほう}からよこした手紙^{てがみ}で、その土地^{ちど}のお土産^{みやげ}がついていないの。逆に京^{きやう}からの手紙^{てがみ}も先方^{せんぽう}ではそう思うだろう、しかしそれは、先方^{せんぽう}の知^しりたい京^{きやう}の事情^{じきやう}をあれこれまとめ、世間^{よかん}で起^{おこ}している事柄^{じへい}などをも書^かくので、十分^{じふぶん}だ。

人^{ひと}のところにはそれは入念^{にんねん}にきれいに書^かきあげて送^{おく}つた手紙^{てがみ}の返^{かへり}事^{こと}を、早く読^よみたい、もう持^もつて来^きてもよいだろうに、それにしては妙^{めう}に遅^{おそ}いことだと待^{まち}つていると、他^{ほか}でもない先^{せん}ほど持^もたせたその手紙^{てがみ}を、それが立^{たて}文^{ぶん}の場合^{ばあひ}でも結^{むす}び文^{ぶん}の場合^{ばあひ}でも、ひどく汚^{よご}らしく扱^{あつか}いけばださせて、手紙^{てがみ}の包^{かみ}みのおもてに封^{ふう}として引^ひいてあつた墨^{すみ}の線^{せん}までも消^きえてしまつたのを、「おいでになりませんでした」とか、あるいは「物忌^{いみ}だからといって受け取りません」などと言^いつて持^もつて歸^{かへ}つたのは、あまりにもがっくりと氣持^{きぢ}ちが萎^しえてしまふ。

また、かならず来^くることになつていゝ人^{ひと}のところ迎^{むか}へのために車^{くるま}をやつて待^{まち}つていゝと、入^いつて来^きた音^{おと}がするの、「来た^{きた}ようだ」と、人^{ひと}びとが端近^{はなぢ}に出^いて見^みると、牛車^{ぎしや}を車庫^{くるまぐら}のほうに運^{はこ}び入^いれて、轆^{なぐさ}をぼんと無雜作^{むざさく}におろすので、「どうしたのだ」と聞^きくと、「今日^{けふ}はいらっしゃいません」と答^{こた}えて、牛^{うし}だけ引^ひつぱつて去^さつていつてしまふの。

家ゆすりてとりたる婿の君の来ずなりぬるも、いとすさまじ。
さるべき人の宮仕へするがりやりていつしかと思も、いとほい
なし。

ちこの乳母の、ただあからさまとて出でぬるを、もとむれば、
とかく遊ばし慰めて、「とく来」と言ひやりたるに、「今宵はえ
まいるまじ」とて返しをこせたる、すさまじうのみにもあらず、
にくさもわりなし。女など迎ふるおとこ、ましていかならむ。
待つ人などある所に、夜すこしふけて、門をしのびやかにたた
かすれば、胸すこしつぶれて、人を出だして問はするに、あら
ぬよしなき者の名のりしてきたるも、かへすがへすすさまじと
いふなかにもすさまじ。

験者の、もののけ調ずとて、いみじくしたり顔に独鈷や数珠
や持たせて、蟬声にしぼり出だし読みたいれど、いささか去り
げもなく、護をうもつかねば、集まりて念じいたる男・女あや
しと思ふに、時のかはるまで読み困じて、「さらにつかず。立ち
ね」とて、数珠とりかへして、「あ、いと験なし」とうち言ひて、額よ
りかみざまに頭さくりあげて、あくびをおのれうちして寄り臥
しぬる、いとすさまじ。

除目につかさ得ぬ人の家。今年はかならずと聞きて、はやう
よりありし人も、ほかほかなりつる、ゐなかだちたる所に住む者
など、みな集まり来て、出で入る車の轆もひまなく見え、物詣
でする供にも我も我もとまいりつかうまつり、物食い、酒飲み、

家中大騒ぎして迎え取った婿が来なくなってしまうのも、ひどく素漠とした
気持ちになる。相当な身分で宮仕えに出ているような女のもとに行かせてしま
つておいて、いつ戻ってくるかと思うなどというのは、実に残念である。

乳呑み児の乳母が、ほんの少しだけと言って外出してしまったところ、乳呑
み児が乳母を慕い泣くので、なんとかかんとかあやしなだめすかしながら、乳
母には「早く帰って来るように」と言つてやつたところが、「今夜はうかがえな
いと思います」といつて返事をよこしたのは、がっかりというだけではなく、
憎らしさも半端ではない。これが愛人を呼び寄せようとする男だったら、まし
てどんな気持ちであろうか。

約束をして待っている男のいる女の家で、夜がわずかにふけたころ、門をあ
たりをはばかりのかのようにそつと叩かせる音がするので、胸がすこしどきり
として、召使いの者を出して名前を聞かせると、とんでもない無関係な男が名告
つてきたのは、なんともまあ興ざめななかでも興ざめである。

修験者が、物の怪を調伏するというので、たいそう得意顔で独鈷やら数珠や
らを憑坐に持たせて、まるで蟬の鳴き声のように声をしぼり出して陀羅尼を誦
していたけれど、物の怪はすこしも退散しそうなようすもなく、護法童子が憑
坐についたふうもないので、一家中でそこに集まり坐つて祈りつづけていた男
も女もおかしいと思つていると、修験者は所定の時間が過ぎるまで経文を誦し
つづけて疲れきつて、「いっこうに憑かない。もうあちらへ行きなさい」と言つ
て、憑坐から数珠を取りもどして、「ああ、ほんとうに効き目がない」と捨てば
ちに言つて、額から上の方に髪の毛をかき上げて、ひとり欠伸をして物に寄り
かかつて横になつてしまったのは、なんとも拍子ぬけである。

県召しの除目で官職をもらえなかつた人の家。今年はずいぶん任官すると聞いて、
以前仕えていた連中も、それぞれによそに勤めていたのや、片田舎に引つ込ん
でいる者などが、ことごとく集まつて来て、出たり入ったりする訪問客の車の

ののしりあえるに、果つる暁まで問たたくをともせず、「あやし」など、耳立てて聞けば、前をう声して、上達部などもみな出でたまひぬ。もの聞きに夜より寒がりわななきをりつる下衆男など、いどもの憂げに歩み来るお、をる者どもは問ひにだにえ間はず。ほかより来たる者などぞ、「殿は何にならせたまひたるぞ」など問ふ。答へには「なにの前司にこそは」とかならず答ふる。まことに頼みける者どもは、いみじう歎かしと思たり。つとめてになりて、ひまなくをりつる者も、やうやう一人二人づつすべり出でぬる。さもえ行き離るまじきは、来年の国々を手を折りて数へなどしてゆるぎありく、いみじういとをしう、すさまじげなり。

よろしう詠みたりと思歌を人のもとにやりたるに、返しせぬ。懸想人は、いかがせむ。それだに、折おかしうなどあるに、返事せぬは、心をとります。また、さはがしう時めかしき所に、うち古めきたる人の、をのがつれづれといとまあるままに、昔おぼえて、歌詠みてをこせたる。

物のおり、扇いみじう思て、心ありと知りたる人にせさせたるに、その日になりて、思はずなる絵など描きて得たる。

産養・馬のはなむけなどの、ものの使に、祿取らせぬ。はかなき薬玉・卯槌など持てありく者にも、なほかならず取らずべし。思ひかけぬことに得たるをばいみじうけうあり、と思たり。今日はかならずさるべき使ぞとときめきて行きたるに、た

轅も隙間がないくらい並び、任官祈願の物詣でをする供にも自分も自分もと競うように大勢が随行参詣し、物を食べ、酒を飲み、皆で大騒ぎし合っていたけれども、詮議が終わる明け方まで報せを伝える者が門を叩く音もせず、「おかしい」など、耳をすまして聞くと、先払いの聲がして、評定にかかわった上達部などもみな宮中を退出なさってしまふ。情報を聞きに前の夜から出かけて寒がりぶるぶるふるえていた下男などが、ひどく大儀そうに歩いてくるのに対して、今まで騒いでいた家の連中は問おうにもさすがに聞えない。折しも外から来合わせた者などは、「ご主人はこの前の国守なんですよ」ときまつて答えるの。任官を心の答として「どこそこの前の国守なんですよ」ときまつて答えるの。任官を心からあてにしていた者たちは、ほんとうに歎かわしいと思っている。翌朝になつて、ぎつしり詰めかけていた連中が、次第に一人二人こそと座をぬけ出してしまふの。そんな連中のようにこの主人の許を離れ去るわけにもいかない者は、来年欠員の出る国々を指折り数えたりして家の中のをそのそと歩き回る、それはもうほんとうに気の毒で、興さめに見えるものである。

そこそこうまく詠めたと思う歌を人のところに送つたのに、返しの歌をよこさないの。女に思いをかけている男の場合には、仕方がない。それでも、男の歌が時機を外さぬ見どころなどもある場合に、それでも返事をよこさないというのは、かえつて幻滅を感じることでもある。また、人の出入りも賑やかに今を時めく人の家に、世間から全く忘れられた老人が、自分が退屈でひまを持て余しているのにまかせて、昔を思い出して、歌を詠んでよこしたの。

何かの晴の儀式の折、扇を格別に考えて、心得があるとわかっている人に調えさせたのに、当日になつて、心外な絵などを描いてよこしたのを手にしたの。産養や旅の餞別などの、物を持つてくる使いに、心付けを与えないの。ちよつとした薬玉とか卯槌といったものを方々に運びまわる者にも、やはり心付けはかならず与えるべきである。思いがけないことでもらうのが何よりも楽

だなるは、まことにすさまじ。

婿取りして四五年まで産屋のさはぎせぬ所、いとすさまじ。をとななる子ども・孫など持たる人のをやどちの、昼寝したる。

おほかた、わらははなる子どもの心地にも、をやの昼寝したるほどは、より所なく、すさまじうぞありし。

寝をきて浴ぶる湯。腹立たしうさえこそおぼゆれ。師走のつごもりがたの長雨。八月の白襲。乳あえずなりぬる乳母。

しみだ、と使いは思っているのだ。今日は間違いなく相応の心付けがもらえるはずの使いだと期待でわくわくして行つたのに、何ももらえないのは、ほんとうにがっかりするものだ。

婿を迎えて四五年たつても産室の賑わいのない家、これもはなだ期待はずれである。成人した子どもや孫などまで持っている二親が、昼寝をしている。そもそも、幼い子どもの気持ちにとつても、親が昼寝をしている間というのは、近づきようもなく、つまらないことであつた。

寝て起きてすぐに浴びる湯。これは興ざめどころか腹立たしいまでに感じられる。十二月が押し詰まつてからの長雨。八月仲秋になつて着る夏の白襲。お乳が出なくなつてしまつた乳母。

46頁16行目「あ、いと駭なし」の「あ」について、三卷本・能因本には「あな」とあり、それに「よるべきであろう」と説く向きもあるが、いかが。「あ」はこんにちの「ああ」に相当する語であり、このままでも通用するであろう。

19行目「除目につかさ得ぬ人の家」に始まる段落のなかの、「…かならず答ふる」や「…すべり出でぬる」といった、連体形によつて文の終止するところを、たとえば前者についていえば、「きまつて答えるものだ」というように、余韻・余情をあらわす表現として解してきた。しかるに、「もの」章段における連体形止めとは何であつたろうか、と改めて問うてみたい。すなわち、本文冒頭の5行目「…産ませたる」や19行目「…往ぬる」などと同様、直後に「…は、すさまじ」と補いうる一文であると見ねば、解を誤ることになるのではあるまいか。

47頁13行目に「それだに、折おかしうなどあるに、返事せぬは、…」とある「あるに」の「に」を、三卷本は持たない。「それが原態か」とも解かれてきたが、三卷本諸注がその「ある」を、あるいは直後の「返事」に掛かるものと見て解したり、あるいは「あるに」と同等の解を与えたりと、なにほどこ窮屈さをともしう処理を施してきたことに鑑みれば、なお決し得まい。通釈には、前田本本文のままを尊重しての理解を示したが、いかがであらうか。

47頁17行目、「物のおり、扇いみじう思て、心ありと知りたる人にせさせたるに、…」に係り、三卷本は「もののをりの扇」と始

発する。それ自体はよいとしても、それを承けての「いみじくと思ひて」との次文の立ち上げに、いささかの唐突感はありませんか。また、「せさせたるに」を三巻本・能因本は「取らせたるに」に作るが、ここは文脈的に、扇への描画をその心得のある人に依頼したということであろう。前田本の伝えているやもしれぬ原初的なものは、やはりもう一度改めて見直されてもよいのではないか、と思わせる一事例というべきであろう。

さらに、本文後ろから4行目、「おほかた、わらはべなる子どもの心地にも、…ありし」の一文についても、たとえば、「三巻本『かたはなる子どもの…あるかし』傳能因本は、底本と同じで、ただ『すさましく』が『すさましく』になつてゐる。（中略）思ふに、三巻本の『かたはら』が『かたわら』になり『わらはべ』へ派生して行つたのではなからうか。『ありし』は『あるかし』が古いかたちと考へられる」と、全面的に三巻本のかたちを原態とみる理解が開陳されてきた。しかしながら、前田本において、直前の一文に取り上げられた「おとななる子ども」、彼らにとつての、その視界に入ってくる「昼寝したる」「親どち」への幻滅の正当が、「おほかた」すなわちそもそも「わらはべなる子ども」時代の「心地」ととつての当然を巡回して跡づけられるという理路は、虚心に見て盤石ではあるまいか。ここでも、前田本こそが伝えるべきを伝えていたらとの思い、おさえがたいのである。

四 枕に、三巻・能因と、前田・堺の四つあり——「おわりに」に代えて——

前田本は、諸伝本中「最古」とされながら、その本文形態からして本来的ではないとの認識のもと、質的に粗悪な末流本といった感覚で受け流されてきたのが実態であると言つてよいだろう。ために、そもそも該本を読むことに、何人も意義を見出してはこなかったし、その表現世界の内的な読みは、いっこうに深められてはこなかったのである。田中重太郎『前田家本枕冊子新註』以降、わずかに一冊の注釈書すら現れ出なかったことが、それを雄弁に物語つていよう。

けれども、他本からの単純な引き写しに見えた文章が実は然にあらざる、また、小異と見えるもののなかに大事へと繋がりゆく可能性を指摘し得ること、右に見来たつたとおりである。堺本について、単なる類纂行為にとどまらぬ、「再構成」の跡を指摘する議論がある。⁽²⁷⁾けれども、その意味で言えば、前田本もまた「再構成本」であり、先に確認を経た「一八五」などは、その「再構成」の都合、堺本の比ではない、とも言えよう。むしろ、それが第三者の手によるものであれば取るに足るまいが、清女その人の営みである

とき、その意義この上ないものとなるであろう。念のために申し添えれば、その可能性は0ではあるまい、というのが本稿の立場であった。

さらにまた、枕草子の一つではない、これも本稿の立場である。三卷本に能因本、さらに前田本と堺本とがあるのだ。いずれについても、くりかえしになるが清女の手が加わっているか否かをふくめ、その生成の源が見極められぬかぎり、四つは等しく扱われねばなるまい。

現今、多様性ということが各所・各方面で言われ、また取沙汰されている。誤解を恐れずに言えば、多様性を知るとは、そのものを形づくる個々を見極めることであり、見極めてそれぞれの差異を確^{しか}と知り尽くすことに外ならない。その意味で、枕草子の前田本という個は、われわれの眼前に、言い得べくんば、これまで知られるとおりの厚遇を得てきた三卷本と同等に開かれているはずである。決して、能因本と堺本との混成本として閉じられているわけではあるまい。見つめられ、見極められるべき沃野として広がっている、と思いたい。そこに豊穡なるものたちは埋もれているのかどうか、埋もれているとしてどれほどに豊穡であるのか、知るも知らぬも総ては私たち次第なのだろうが、右には、そのささやかな、しかし確かな片鱗を示したつもりである。

〔注〕

- (1) 引用は、尊経閣叢刊丁卯歳配本『前田本枕草子』（育徳財団、一九二七年）に拠る。
- (2) 『別冊國文學 日本古典文学研究必携 79 秋季号』（學燈社、一九七九年）の「枕草子」の項参照。
- (3) 以下、前田本の章段番号は、便宜上、田中重太郎『^{前田本}枕冊子新註』（古典文庫、一九五一年）に従う。
- (4) この「饗」、底本では「郷」と「食」との二字に作る。ゆらい「饗」の一字の上部と下部とがそれぞれ「郷」と「食」とに分かれた書写されたものと見て、「饗」へと復した。
- (5) 「さまよひありく」の「さま」の二字は、底本では「まか」に作るが、「ま」（字母「万」）は「さ」（同「左」）からの、「か」（同「可」）は「ま」（同「万」）からの、それぞれ誤写と見て、原態に復した。

(6) 以下、三卷本の本文ならびに章段番号は、便宜上、石田穰二訳注『新版 枕草子上・下巻 現代語訳付き』（角川ソフィア文庫、一九七九・一九八〇年）に拠る。

(7) 以下、能因本の本文ならびに章段番号は、便宜上、松尾聰・永井和子校注・訳『枕草子 一・二』（完訳 日本の古典第12・13巻、小学館、一九八四年）に拠る。

(8) 「他にかちたる人」の「か」は、底本「う」だが、「か」（字母「可」）から「う」（字母「宇」）への誤写と見て、原態に復した。

(9) この箇所、底本は「とのばらのさぶらふに」に作る。文脈からは、家臣、部下の意の「さぶらひ（侍）」とありたいところである。いま、書写の或る段階で「さぶらひ」↓「侍」↓「さぶらふ」と転じたものと見て、意改に従い「侍」とした。

(10) 堺本の本文は、吉田幸一編『堺本枕草子 斑山文庫本』（古典文庫、一九九六年）に拠り、私に句読点を加し、適宜、仮名に漢字を当てるなど一般的な校訂を施して掲出する。ただし、章段番号は林和比古編著『堺本枕草子本文集成』（私家版、一九八八年）に拠る。

(11) 山中悠希『堺本枕草子の研究』（武蔵野書院、二〇一六年）三一頁。

(12) 山脇毅『枕草子本文整理札記』（山脇先生記念会、一九六六年）四四節（二二〇～二三三頁）や注（七）所掲書（一四三二～四四頁）など。

(13) 注（三）所掲書一三四頁、頭注（三）に、「以下（稿者注…「さう色（むしき）の、藏人（くら）になりたる」以下を指す）三卷本・傳能因本にない。堺本にはこれと同様の文があるが、「めでたきもの」の文を誤って収めたのであらう。底本は堺本系統から同じく引いたのであらうか」とある。

(14) 山中悠希は注（11）所掲書において、堺本の類纂のみにとどまらぬ、いわば堺本の堺本による堺本のための本文形成の痕跡を根拠に、堺本を「再構成本」と認称すべきことを説いているが、その伝に拠ってよければ、前田本もまた独自の本文を形成しており、紛れもなく「再構成本」である。

(15) 注（12）所掲書一二〇頁。

(16) 「つき影」は、底本「さしかけ」を改めた。「さ」（字母「佐」）と「つ」（同「徒」）、「し」（字母「新」）と「き」（同「祈」）、それぞれの文字のあいだでの誤写を想定しての意改である。

(17) 「かし」は、底本「よし」を改めた。「か」（字母「可」）と「よ」（同「与」）とのあいだでの誤写を想定しての意改である。

(18) 「も」は、底本「とも」に作るが、意を以て改めた。

(19) 『枕冊子全注釈四』（角川書店、一九八三年）二八〇～二八一頁。

(20) 「火桶」は、底本「をけ」。三卷本・能因本により改めた。

(21) 注（三）所掲書九八頁、頭注（一四）。

(22) 注（六）所掲書二四六頁。

(23) 注（三）所掲書一〇〇頁、頭注（一六）。

(24) 注(22)に同じ。

(25) 萩谷朴校注『枕草子上』(新潮日本古典集成、新潮社、一九七七年)六七頁。

(26) 注(3) 所掲書一〇一頁、頭注(二八)。

(27) 注(11) 所掲書全編に通底するが、序章に端的に披瀝されている。